永代美知代「デツカンショ」解説

―夏目漱石の後任一高教授・岡田實麿にみる近代日本―

有元　伸子
板倉　大貴
萬田　慶太
熊尾　紗耶

はじめに

本稿は、永代美知代の小説「デツカンショ」についての解説である。「デツカンショ」の作品本文は、「〈資料翻刻〉永代美知代「デツカンショ」」(1)(2)として、『内海文化研究紀要』四四(二〇一六年三月)、同四五(二〇一七年三月)に翻刻掲載した。(2)には全体の注も付しているので、本稿と併せてご参照いただきたい。

永代美知代(一八八五～一九六八)は、広島県上下町出身の小説家・翻訳家である[1]。旧姓は岡田。田山花袋「蒲団」の女主人公・横山芳子のモデルとして知られているが、自身も小説や少女小説を多く書き残しており、ストウ夫人「アンクル・トムズ・ケビン」の完訳としての本邦初訳『奴隷トム』(誠文堂、一九二三年)も美知代の仕事である。

「デツカンショ」の原稿は、作者である美知代の没後は原博己氏が保存し、美知代の生家を改築して開館した上下町歴史文化資料館(現・府中市上下歴史文化資料館)に寄贈したもので、コクヨのA4サイズの四百字詰め原稿用紙に、ブルー・ブラックのインクで書かれている。原稿用紙は二つ折にし、二穴を紙紐でまとめ、さらに三穴を紐でまとめた袋綴じである。原稿のページ番号は1から100までふられているが、77ページは無く、現存する原稿枚数は九九枚である。ただし、内容的には76ページから78ページへの接続に不自然なところはなく、美知代がページ番号を打ち損じたものと思われる。

大正末年に永代静雄と離婚して渡米した美知代は、一九四一(昭和一六)年の日米開戦直前に帰国し、妹・萬壽代の嫁ぎ先の八谷家を頼って広島県庄原市で余生を過ごした。本作品の旧蔵者である原博己氏は、美知代宅に英語を学びに通い、晩年の美知代の生活を間近に見てきた。晩年の美知代は、一九五七(昭和三二)年頃からの田山花袋研

究者・岩永胖東京学芸大学教授の数度にわたる訪問を契機に、一九五八～五九年にかけて、明治末から大正期にかけて雑誌に発表した既発表作品を改作して原稿化するとともに、花袋や独歩との交流期を回想する新たな原稿も書いた(2)。このうち、旧作を改稿した作品は、『スバル』や『中央公論』に掲載された美知代の代表作・自信作と呼べる作品ばかりである。また、原氏によれば、美知代は新たに書き下ろした原稿を朗読して原氏に聞かせたが、朗読された記憶があるのは「云ひ得ぬ秘密」と「国木田独歩のおのぶさん」の二作のみであり、「デツカンショ」は含まれていなかったという。原氏の証言からは、本作「デツカンショ」は、昭和三〇年代に新たに書かれたものではなく、大正期に発表した自身の旧作を書き直した可能性が高い。

さらに、語りの時間の面からも昭和三〇年代に新たに書き下ろされた「云ひ得ぬ秘密」と「国木田独歩のおのぶさん」の二作品は原稿執筆の時点からの回想の形をとっているが、本作「デツカンショ」は作中時間と語りの時点が離れていない。また、二作に比して記憶の褪色が見られず、臨場感がある。後述するように、「デツカンショ」の作中時間は大正五年前後に設定されているが、作品自体もそれに近い時期に執筆された可能性が極めて高い。美知代の場合、雑誌掲載小説は短編が大半であり、九九枚の本作は新聞に連載掲載されたと思われる(3)。とはいえ新聞雑誌に掲載された「デツカンショ」の原作は現在までに発見することができておらず、昭和三〇年代に新たに書かれた可能性も完全には捨てきれないのが現状である。

一　小説「デツカンショ」の構成

作品「デツカンショ」は、（一）から（八）の八節からなる。

（一）石門のある邸で、直美は幼い娘の万里子と口論になる。英語教授の夫は、母娘の口論の要因が「どうして」という疑問詞の使い方にあったことを解説し、娘との意志の疎通をはかるために方言を廃して「標準語」を使うように直美に勧める。

（二）石門が目印の植村邸は、東中野の高級住宅地に存する。当主の植村孝麿は、同志社、慶応を卒業して洋行し、帰朝後は神戸高商に勤めていた。そこへ『我が輩は猫である』の秋目さんの「新聞界天降りの事件」が勃発。植村は、一高校長の古渡辺博士の縁故により、秋目さんの後任として一高教授になった。それからかれこれ十年。植村の同志社時代の友人で、益富蕗峰先生が刊行するK新聞の編集局長は、官私の格差のある日本社会にあって私大出身者の帝大教授への憧れや、秋目さんの教授の椅子の「おつぽり投げ」の衝撃を語り始める。

（三）K新聞編集局長の語りは続く。同志社と慶大を出てアメリカ式の「ハイカラ」な植村が、「蛮カラ」で「デカンショ気質」の一高教授が勤まるわけがないと、Kはかつて植村に強く忠告したのだった。だが、植村一高教授の名も久しい現在、Kは安堵とともに、自身が帝大教授になれなかった一抹の悲哀も感じている。

（四）東中野駅前の三嶋屋は荒物雑貨・酒などを手広く扱い、常連たちが酒や茶菓子とともに世間話を繰り広げる。買い物に来た永川美

子は、石門の家に賊が入って赤銅造りの樋が盗まれた噂話を聞く。植村孝麿は美子の実兄であった。嫂の直美の評判のよくないことを知った美子は、そっと店を出る。

（五）美子は歩きながら、嫂のこれまでの言動を思い起こして憂鬱になる。直美は、一高教授の給料に不満をもらしたり、三越に贅沢な着物をあつらえたり、東久邇の宮様へ伺候した実家自慢などで、美子を辟易させてきたのだ。

（六）進取の気象に富んだハイカラな美子の実家の植村家とは対照的に、嫂は小学校卒業後は女学校に通わずに家庭教師をつけられて、田舎で世間知らずとして育った。美子は、勘当覚悟で苦学生と結婚して苦労をした自分自身と箱入りの嫂を比べ、兄一家の生活や金銭問題について談判すべく石門の家に向かう。

（七）兄の家の様子がおかしい。兄と嫂の間で、再び方言問題が勃発していたのだ。美子は、最近教会で見聞した話を持ち出す。外遊するS氏に、外国人宣教師が「アイ　ミス　ユウ」（あなたが居ないと淋しい）と別れを惜しんだのに、S氏は「ミス」の意味を誤解して怒ったのだ。

（八）この話で空気がほぐれ、植村教授が新企画の雑誌に掲載する原稿の話を始める。「ミス」は、英語の入試でも受験生が間違いやすい単語であった。「アイ　ラブ　ユウ」と「アイ　ミス　ユウ」の違いを解説したあと、兄は嫂に向かって英語の勉強を始めてほしいと頼む。秋目先生の猫とクシャミと文学博士を使った英語のジョークが披露されて、大団円。

夏目漱石が一高・東京帝大の教授を辞して朝日新聞社に入社したのは、一九〇七（明治四〇）年三月。岡田實麿は同年九月に漱石の後任として一高教授となった。それから「彼れ是れ、十年になるね」と作中人物が語っているので、本作「デツカンショ」の作中時間は一九一七（大正六）年ごろということになる。ただし、作中には漱石没後を示す記述がないため、實麿が中野に転居した一九一四（大正三）年から漱石が亡くなる一九一六年（大正五）年あたりに設定されていると見なせよう。

「デツカンショ」において、美知代自身をモデルとする永川美子は、「私だってこんな風では、童話の続きも書けやしない。仕合せと、その童話の〆切りまで、まだ四五日の余裕もある」と、職業的な童話作家として設定されている。大正五年前後の美知代自身も、五歳の息子・太刀男を育てつつ、『少女世界』『ニコニコ』などの雑誌に多数の少女小説や児童小説を執筆し、『婦女新聞』などに不定期に短編小説を掲載していた。大正四年には、永代静雄との夫婦仲が悪化して、三月に離婚の噂が『読売新聞』に報じられるなどしたが、和解。田山花袋が「備後の山中」を発表して美知代を過去の女として封じ込めたことを契機に、「『蒲団』、『縁』及び私」（『新潮』一九一五年九月）を発表し、花袋を強く批判する。翌々年の一九一七年には、結婚に際して入っていた田山家の戸籍から抜けて、静雄の戸籍に入籍。単著『花ものがたり』や『ケーザル』を刊行するなど、「デツカンショ」の作中時間である一九一六（大正五）年前後は、作者である美知代にとっては、前半生で大きな葛藤の要因となった師・花袋との関係を整理し、仕事も家庭も相対的に安定した時期であった。

二　岡田実麿

「デツカンショ」に登場する植村孝麿のモデルは美知代の長兄・岡田実麿（ひつまろ）、その妻・直美は嫂の直、娘・万里子は姪の都子（くにこ）である。美知代自身は永川美子として登場し、夫の永代静雄も永川として名前が出される。ほかに実在する人物をモデルとしているのは、「猫」「坊ちゃん」を書いた「秋目さん」として夏目漱石、「一高の校長、古渡辺博士」は新渡戸稲造、「益富蕗峰先生」は徳富蘇峰、植村の同志社時代の友人の「K新聞編集局長」は国民新聞編集局長の伊達源一郎、「早大の境内先生」として坪内逍遥が描かれている。これら多彩な人物たちのなかで作品の主軸をになうのは、兄の實麿をモデルとした植村孝麿一家である。

岡田實麿（一八七八（明治一一）年二月一日～一九四三（昭和一八）年八月一八日）は、広島県甲奴郡上下町出身の英語学者である（4）。岡田家は豪家で、父・胖十郎は金融業を営み、上下町長をつとめるなど町の名士で、母・ミナともども熱心なクリスチャンであった。實麿は、同志社、慶応義塾の二大学を卒業し（5）、さらに米国オハイオ州のオベリン大学に留学した。帰国後、一九〇三（明治三六）年に神戸高等商業学校、一九〇七年（明治四〇）に夏目漱石の後任として第一高等学校教授となった（6）。多数の英語教科書や参考書の編集・執筆、雑誌『受験英語』『受験と学生』への寄稿など、学生や受験生の英語指導にも尽力するとともに、ポー「甲虫」「アッシヤー館の沒落」「渦巻」、メリメー「カルメン」などの翻訳も行った。関東大震災の翌一九二四（大正一三）年四月に一高を辞して、かねて講師を勤めていた明治大学に移った。明治大学で教えるとともに、同志社の先輩で英語学者・キリスト教社会主義者の村井知至（ともよし）が設立した第一外国語学校の副校長なったが（7）、同校は数年で廃校。一九二七（昭和二）年からは、山崎寿春（としはる）が設立した東京高等受験講習会（後の駿台予備学校）でも教えて、英語科の主任で「看板教授」であった（8）。一九三三（昭和八）年に父・胖十郎が莫大な負債を残して死去、實麿は後始末に奮闘した。翌三四年と三七年に脳溢血にかかるなど体調を崩し、三九年に予備校を辞し、四三年八月に亡くなった。明治大学の教壇には、亡くなる年の四月まで立った（9）。實麿が残した多数の英語学習参考書の多くは、没後の戦後になっても改訂されて長く読まれた。

「デツカンショ」は、美知代の兄・實麿への敬愛と誇りの情に貫かれている。七歳年長のこの長兄に、美知代はずいぶん世話になってきた。小学校を卒業後に国元を離れて神戸女学院に進学した際には、神戸高商教授だった兄の家に住まう時期もあった。花袋の弟子として上京、恋愛事件によって帰郷した後に再上京すると、一高教授となった實麿宅に寄寓した。妊娠によって実家との間が齟齬した際にも、花袋や実家との間の仲介をしてくれたのが實麿だった。また、美知代は、實麿の長女・都子（「デツカンショ」の万里子のモデル）をずいぶんかわいがったようである（10）。

このように美知代に親代わりの愛を注ぎ、さらに夏目漱石の後任として一高教授にもなった誇るべき一族の出世頭が長兄の實麿だった。その實麿を作品の中軸にすえながら、テクストには、いつくかの位相差のあるモチーフが配置されている。一つは夏目漱石をめぐる官と私の問題系、もう一つは嫂との間の女性の生、さらに言語の問題であり、

いずれも近代日本の一断面を示していよう。

三　「デツカンシヨ」が描く夏目漱石をめぐる噂

一高教授の植村孝麿は、『石門の植村さんて、は猫の後釜だとよ』（二）と、近隣の者たちに噂される。「は猫」については、「秋目さん」が書いた「『我が輩は猫である』の、は猫ぢやないか」（二）とも言われて、「秋目さん」は夏目漱石をモデルとした人物であることがわかる。市井の人々の口を借りて語られる「デツカンシヨ」の漱石像は、当時の漱石をめぐる言説を如実に知らしめる。

植村教授は神戸高商に勤めていたが、「猫の秋目さん、新聞社に天降り事件突発。一高教授の椅子があいちやつた」。そこに植村が一高教授に決定すると、「これこそ学閥七不思議とばかり、色々世評の的にされた」（二）。植村の一高教授就任に反対の忠告をしたK新聞編集局長の口を借りて語られる、漱石の教授辞任と朝日新聞社の嘱託就任はかなり辛辣なものである。

漱石の新聞界天降り事件は、新聞紙上を賑わせた「大々的センセイションの見本」であり、大衆受けは良かった。しかし、帝大教授志望を持っていた「同志社出」のK新聞編集局長に言わせれば、帝大教授の地位を望んで「永い年月苦しみ悩んだ亡者共が、世間にはうぢや」いて、「勿体ない！気でも狂つたか、教授の精神状態まで気遣ふ騒ぎだ。ところが当の教授、正気も正気、涼しい顔で澄まして御座る」ため、「私学の亡者共、呆れて眼をむく以外芸もない」と、漱石の態度を高踏的だと批判する（二）。

また、「デツカンシヨ」では、漱石の博士号辞退に関しても紙幅が割かれている（二）。K新聞編集局長は、「周囲がハラハラ御機嫌とりに、博士号を贈呈すると、けんもほろゝな権幕で、散々つぱらごてた揚句に、蹴飛ばした―この大馬鹿のとんちきめ、馬鹿士にされて堪るかい。馬鹿にするない！　大見え切つたこの御託宣の啖呵（たんか）が、ウンと大きく一般大衆に受けて、どえらく唸らせた」（二）と語る。

漱石の博士号辞退に対する世評としては、たとえば「某君（博士にあらず）曰く　夏目君は痛快な事をやりましたねえ、一体文学博士会なんて人を馬鹿にしてるからね、人が死にかけたり、何うしてもそれを與へないと博士会の評判が悪くなりさうだと時々何か思ひ出した様な事をするではないか」（「曰くと曰く」『読売新聞』一九一一年二月二五日朝刊）とあるように、おおむね好意的に迎えられたようである。名誉欲が希薄な漱石が博士号を辞退したとの見解が、一般には通用している。

しかし、「デツカンシヨ」では、「日本最高学府の教授だといふ、それだけで、結構立派に光つた背景の上に、今度又更らに、滅法素敵もなく光り輝やく、大きな金鉛の星が添へられた。〔……〕将来背景に用ひる売名の利得は莫大だ。これを考慮に入れない馬鹿があらうか。斯ろ万事成算あつての上だ」と、小説家としての名声・人気獲得と著書の売れ行きに、教授辞任と博士号辞退の二つの件が大きく影響したとの推測を寄せている。

さらに、「著書の売れること、売れること、まるで羽が生へて飛んで行くみたいに売れるんだ。印税の利率の高い事、曾て聞いた事もない」

と（二）、印税の高さも噂にのぼる。松岡譲によれば、漱石は独自に出版社と印税契約を結んでおり、『鶉籠』の場合、初版一割五分、第二版からは二割、さらに六版以降（のちには四版以降）は三割と言ったものであったらしい（『漱石の印税帖』朝日新聞社、一九五五年）。これが出版界の噂になり、漱石は三割一分も印税を取るという風評が立っていた。

「デツカンショ」では、名声を築き上げた大作家・夏目漱石を思わせる「秋目さん」についての辛口の噂話が描き込まれている。この漱石に対する揶揄的な記述は、一つには、「余裕派」漱石に対する「自然主義」の代理を買ってでる意識もあったのかもしれない。よく知られているように、美知代の師であった花袋は、『蒲団』を発表した翌一九〇八（明治四一）年、漱石との間で、『三四郎』やズーデルマンの「消えぬ過去」をめぐって、小説と「拵へもの」に関する論争をした。花袋の「作為物（こしらへもの）」批判に対して、漱石は、「拵へものを苦にせらるゝよりも、活きて居るとしか思へぬ人間や、自然としか思へぬ脚色を拵へる方を苦心したら、どうだらう」（「文学雑話」『早稲田文学』一九〇八年一〇月）と応じた。漱石への辛口の視線は、自然主義者としての美知代の立場表明であるのかもしれない。

同時に、私学出身ながら漱石の後任として一高教授となった岡田實麿の評価を相対的に高める効果も狙ったものであろう。漱石こそは、官立の一高・帝大を出て、一高・帝大の教授となった学歴エリートと一般には見なされていたからである。「デツカンショ」の作品世界の中心を担う實麿を評価するためには、立身出世の最終ゴールと見なされていた「帝大教授」の職を捨てて新聞界に転身した前任者の漱石の言動を揶揄せざるをえなかったのであろう。

四　官と私の対立構造

「デツカンショ」の物語構造には学歴が大きな問題系として含まれており、美知代の実兄をモデルとして創出された「一高教授」の植村孝麿を通して展開される。孝麿が教授となった旧制の第一高等学校は、現在の東京大学教養学部。竹内洋によれば、「旧制高校は近代日本の指導者や知識人を多数輩出した学校」であり、「旧制高校という社会化（価値・知識・技能などを習得する過程）装置を抜きに近代日本社会を考えることはできない」とされ、「旧制高校的なるものというのは、学歴貴族文化」のことだと言う（11）。とりわけ第一高等学校は、長く唯一の帝国大学であった東京大学の予備門を前身としており、超エリートコースであった。

孝麿の一高教授就任については、「同志社と云ひ慶応と云ひ、二つとも卒業はして居たが、どちらも私立の大学だから、いざ愈々履歴に書いて、官学方面に提出する段ともなれば、とても心細い。世を挙げて官閥ならではのその当時、所詮は私学の悲しさ。官閥最高学府の此の椅子が、望んで手に入るものではない」（二）と言及され、また、植村孝麿の同窓同期の友人であるK新聞編集局長は、「帝大教授」になるK自身の夢は「同志社入学の途端、早くも悉く崩壊されて居た訳だ」（二）と述べる。

ここから見えてくるのは、官立と私立との明確な対立構造であり、

格差である。植村孝麿はこの官私の対立・格差の構造を乗り越えた／乗り越えてしまった人物なのである。

日本において私学は官学の下位に位置づけられるという特色が存するが、このような体制が確立されたのは、天野郁夫によると、明治十九年に森有礼が文部大臣になってからであった(12)。

森は、まず「帝国大学令」「小学校令」「師範学校令」「中学校令」などの「諸学校令」とよばれる一連の学校に関する法律をつくり、官立・公立・私立という学校の設置形態の違いを明確化した。そのうえで、高等教育は国家の責任で行うこととして帝国大学を創設し、「帝国大学への進学者の予備教育機関として高等〔中〕学校の制度」(天野)を設ける。さらに帝国大学に「積極的に多額の教育投資」をし、その上で政策の総仕上げとして「官立学校の卒業者に対する特権付与を様々な形で行な」った。

学位授与権は帝国大学だけに与える。学生の称号も、帝国大学出身者にしか許さない。それだけでなく、様々な国家試験―医師や弁護士のような専門職の試験、それから高級官僚になるための試験についても、官立学校の卒業者に、たとえば試験免除などの特権を無条件で与えるということをした。もう一つ重要なものとして、徴兵令上の特権である。これも在学中の徴兵猶予とか、兵役年限の短縮といった特権を次々に与えていったわけです。(天野郁夫)

このような森の政策によって、官学と私学の階層構造が形成された。のちに各法令の影響によって私学の地位の多少の上昇はみられるが、基本的に官学の下位に私学が位置づけられる構造は大正八年の「大学令」まで変わることがなかった。

では、当時、どのような官学と私学のブランドイメージがあったのだろうか。

吾人今官学卒業生の職業種別表を一瞥するに、各学科の別を問はずして、行政司法の官吏と教員とに於て最も多数を占め、技師たり、医師たる者之に次げり。既に官吏と教員とに於て多数を占む、即ち官学が官吏養成所たり、教員養成所たる事を反証するものにあらずや。〔……〕吾人が私学を以て、商店主義なりと謂ふは、其多くが国家的事業を名として、実は営利を目的と為すが故なり。〔……〕／而して官学は当局の殊寵を受け、特殊の恩恵に浴するが故に、其貴族的、保守的なるは免るべからざる所にして、私学は個人或は十数者の経営に過ぎざるが故に、其平民的、進取的なるは自然の勢なり。乃ち前者を以て羅馬法王に比せば、後者は以てプロテスタント教徒に比するを得ん乎。

(臼田亜浪(卯一郎)『最近学校評論』秋霜館、明治三九年二月)

官臭紛々たる官学の気風と、自由奔放なる私学の気風と、因循と姑息と、努力と活動と――是れ、官学と私学の特色を想ふ時、髣髴として眼前に浮び来る所の面影也。

(吉野鉄拳禅『党人と官僚』大日本雄弁会、大正四年四月)

つまり、官学は、公性、中心性、保守的貴族的といったイメージが

付与され、それに対して私学は、周縁、実業的、平民的で自由といったイメージが付与されている。

作中の設定時間より後の大正八年に、「大学令」が施行される。「大学令」以前の私立大学は、「大学」と呼称されてはいたものの、制度的には「専門学校」として位置づけられていた。それが大学令によって、「帝国大学以外にも、官公私立の大学の設置が認められることにな」り、「専門学校の大学への昇格」が行われて、私学も官立と同等の地位を与えられることに法制上はなった（天野）。大学令によるこうした措置は、私学にとってプラスに働くと見なされる一方で、独自の校風や公に対するカウンター性、自由や反抗といった私学の長所を削ぐと危惧されもした。現実に、戦後に至るまで、私学は、官学に対する下位という定位置にあると見なされたのである。

では植村孝麿の描写には、永代美知代のどのような意図がこめられたのか。先述したように、同志社、慶応を卒業後にアメリカに留学し、一高教授となった孝麿は、官立と私学の対立を乗り越えた人物である。その孝麿に対してK新聞編集局長は「猫の後釜がつとまる柄かよ」（二）などと非難をするが、このような対立構造に縛られる俗な人物に対置されるかたちで、孝麿は描きだされているのだ。

五　岡田實麿と夏目漱石

作品「デツカンショ」のタイトルは、旧制高校生が愛唱したデカンショ節に由来する。弊衣破帽、バンカラの気風で知られる旧制高校の学生寮では、真夜中に大声をあげたり乱暴狼藉して寝ている者を起す蛮行・ストームが行われ、そうした際にデカンショ節は寮歌とともに愛唱された。デカンショ節は、デカルト、カント、ショーペンハウエルを愛読する旧制高校生のエートスを象徴する歌である。本作の中では、そうした旧制高校の気風を模倣しつつ行われる舌戦に際して、リズムよく互いにかけあう感嘆詞・はやし言葉として用いられている。「当世流行のアメリカ式、本家本元のハイカラで御座い、が聞いて呆れら、貴様そのハイカラで、正気で、本気で、向ヶ丘の大蛮カラを、向うに廻して、つとまる気かつてんだ、べら棒め、呆れた狂人め」と、植村孝麿の一高教授就任を阻もうとするK新聞編集局長は、「孝麿などとお公卿のやうな名をつけて―と来らい。涼しい顔の胡瓜！一高に不向きと知らないね。デツカンショ！」とはやしたてる。一高の弊衣破帽の「バンカラ」な気風に対照されるのが、私学出身で洋行帰りの孝麿の「ハイカラ」であった。

竹内洋は、明治三十年代に「ハイカラ」という言葉が登場することで、対立項の「蛮カラ」という用語が析出されたという。「「ハイカラ」という用語の出現時には軽薄や虚飾家、「灰殻」などと否定的な意味あいも強かったが、しだいに肯定的用語になっていく。そのぶん「蛮カラ」の分がわるくなる」と指摘する（13）。こうした蛮カラな運動部的学生文化を、「西洋文化を中核にした教養主義へと転換」させたのが、岡田實麿を一高に招聘した新渡戸稲造校長であった。漱石辞職後、その後任と目された学者は粟野健次郎など他にもいたが、實麿が抜擢されたのである（14）。

出口競『全国高等学校評判記』（敬文館、一九一二年）の第一高等

学校「十三、教授評判記」には、「校内唯一のハイカラは岡田教授（實麿）を以て随一とすべく、同時に出勤時間の最も遅きも又た此の先生である」とある。「ハイカラ」は、一高にあって實麿の代名詞であった。一高の卒業記念写真を参照しても、洋行帰りの實麿は、他の教員に比べて服装や風貌において際立って「ハイカラ」である。

ただし、洋行帰りの「ハイカラ」性においては、漱石も同様であった。『坊っちゃん』の赤シャツのモデルが戯画化された漱石自身に目されることも多い。「デツカンシヨ」において、孝麿こと岡田實麿は官と私の対立構造を乗り越えた人物として、官立の学歴貴族であった「秋目さん」こと漱石に対比されているかに見えるが、明治の学校システムのなかにおいては漱石の学歴も「宙吊り」だという指摘もなされている(15)。竹内は、漱石の帝大教師から朝日新聞への転身（「大学屋」から「朝日新聞」への転身）は、「成りあがり的な明治と一体となった帝大的なるもの（成りあがり知識人文化）への漱石の違和感と意地が作用していた」と見なす。

「デツカンシヨ」においては、秋目さんは植村孝麿と対照的であるかのように揶揄的な噂話として語られているが、この点において、漱石と實麿は実は類似した感性を持っていたと言えるかもしれない。作中時間内では一高教授に収まっている孝麿のモデル岡田實麿も、学習参考書や受験指南書の執筆が評判を呼び、関東大震災の翌年には一高を辞職して私学の明治大学に移り、同時に駿台予備校の看板教師となるのである。私立から官立に越境した實麿もまた、人々の憧れのエリート養成機関たる「一高教授」の地位を捨てて私立に活躍の場を開拓していった。

【画像】1912（明治45）年5月14日　第一高等学校独法科卒業生記念写真
前列右から3人目が岡田實麿、囲み写真中央が新渡戸稲造校長。
（東京大学総合文化研究科・教養学部　駒場博物館提供）

教えることが苦痛になり、「とにかくやめたきは教師、やりたきは創作。創作さへ出来れば夫丈で天に対しても人に対しても義理は立つと存候」(高浜虚子宛書簡、一九〇五年九月一七日)と職業作家になった漱石に対して(16)、實麿は教育者として、実務的に優れた手腕を発揮した。

實麿自身も、自身が夏目漱石の後任であり、かつ外部からそのように見られていることを意識し続けていたようである。後年、駿台予備校で教えることになるが、生徒たちのアンケートには次のように記されていたことが『駿河台学園七十年史』に紹介されている(17)。

【岡田實麿】

「名講義でした。先生の参考書を使っていたので、ご本人をみて、特に強い印象をうけました」

「先生は夏目漱石の後任として一高の教授になられたらしく、〝absent 不在である〟という言葉には〝在宅していても会うことができない〟という意味がある。漱石はよく、書斎から〝夏目は absent だよ〟と来客に大声でどなっていた、と話された。

漱石は言葉の意味をわかって使っていたよい例だという話が印象的でした。私は後日、アメリカの大学に留学しましたが、駿台での勉強が大変役に立ちました」

「猫は元来マスタアは嫌ひ、クサミが出て来りヤ猫喰わぬ」の冗句で「デツカンショ」は終わる。「デツカンショ」は漱石の後任の一高教授とその家族の言動を描き、漱石という文学史の光の部分に対して、一見すれば影の生き方に見える。ここに批評性の欠如を見るか、漱石という作家存在に対する対抗言説を形成していたと見るかは読者次第であろう。

六　東中野に暮らす植村孝麿と妻・直美 ―ハビトゥスとモード

植村孝麿は東中野の高台に石門のある邸を構えている。一家は周辺一帯の有名人として土地の人々から噂されるが、それは植村家の暮らしぶりだけによるのではなく、当時の東中野の状況も起因しているだろう。

明治期から大正期にかけて、東京市の発展に伴い、豊多摩郡中野町はベッドタウンとして宅地化が進められ、とりわけ、東中野駅周辺の高台にある大塚、桐ヶ谷、上ノ原、小滝などは、各界の名士の住むお屋敷街として知られていた。また、新しく建てられた上流の邸宅が数多く並ぶ一方で、古くからその土地に住む、農家や商家等もわずかながら点在していた(18)。『中野区民生活史』によると、大正九年時点の中野町の職業構成において、最も多いのが工業従事者で、全体の三四パーセントを占めるが、次いで公務・自由業者(軍人・官公吏・雇傭員が中心)が二四パーセントと高い割合を示し、「「知識人の町中野」の「原型」」が見受けられる(19)。なお、商業従事者は二〇パーセント、農業従事者は一一パーセントであった。

これら官吏・軍人・会社員の多くは地方出身の上京者で、「武士の生活様式を受け継ぎ、大正期の職住分離の進むなかで、その住様式を町

屋にかわる日本の都市住宅の典型としてひろく定着させた」という（20）。彼らの住居は、門塀によって近隣との関係を遮断しながら、居間において来客をもてなすという構造となっていた。プライバシーの概念が薄く地域共同体との関係を重要視する農家や商家のあり方とは、まるで異なるものだったのである。植村一家もまた、地方から新たに東京へと移り住んだ人々であり、地域共同体に属していない。石門と西洋館のある植村邸は、地縁・血縁共同体から切り離された典型的な都市住宅であった。

近代以前の地域社会とは異なる都市にあっては、外観が非常に大きな意味を持つ。それは建築ばかりでなく、服装や道具類にいたるまで同様である。作品の中盤で植村一家と美子との交流を通じて描かれるのが、夫婦の家柄・資産・ハビトゥスの差異、さらにそこから下降した者をめぐる問題系である。

例えばそれは、美子の「この頃移転して来たばかりで、平常着のめいせんものに、紫朱子の帯では、まさか石門に縁故の者とは気がつくまい」（四）という自己批評にも示されている。「家と家との結婚時代」にあって、美子は、「碌に背景の親類縁者もない、ひとりぽつちの貧乏者の、苦学生を撰」び、「家」に背いて自由結婚を敢行して「勘当」に近い扱いを受ける。自らの望む相手との結婚を果たすことで、元いた階層から下降することを選んだ女性なのであり、学問やその階層独特のハビトゥスといった文化資本を備えながらも、身を飾ることをせず、職業的に「童話」を執筆しながら、つましい生活に甘んじている。

一方、美子の嫂にあたる植村直美は、流行を追い求め、三越で番頭に勧められるままに、季節に合わせて、本物の珊瑚や真珠をはめこんだ贅沢な衣装を作ろうとする。一九〇四（明治三七）年、「デパートメントストア宣言」をして日本最初の近代的な百貨店となった三越は、その前身が呉服店であったことから、高級なイメージが強く、山の手の上流階級の婦人を主な顧客としていた（21）。三越をはじめとする百貨店の登場は、流行の概念を普及させ、消費をステータスとする意識の変化をもたらすとともに、「虚栄」を誘発する装置としても機能した（22）。家柄や資産を誇り、外観を飾ることで自らの階層を示そうとする嫂に対し、学問や品格など内面に価値をおく美子は、批判的な態度を示す。相応の時間や努力を要する文化資本とは異なり、流行を身にまとうことは、金銭によって簡単に手に入れることのできる上流階級の記号であったからだ。

岡田實麿は、結婚から四年後の一九〇七（明治四〇）年八月に最初の妻・登美恵と死別し、その後、土居直と再婚して四人の子をもうけた。直は明治一九年六月、岡山県生まれの士族。父は土居通政で、作中時間における土居家の当主は直の兄・通博であった。通博は、土居銀行ほかの頭取、津山銀行ほかの取締役で、明治三九年には多額納税者として貴族院議員になっている。岡田家・土居家ともに、同時代に多く出版された紳士録に記載があるものの、土居家の方が、岡田家よりも明らかに資産量が多かった（23）。

地方では、小学校卒業後に進学するためには、神戸、京都、東京などに出なくてはならない。例えば、作者の美知代は、一三歳で上下小学校をすると、単身神戸女学院に進学して寮に入った。しかし、作中の嫂・直美は、「早くに母親をなくした幼い娘を、見知らぬ他人の中で、冷い風に吹かせたり、世ち辛い浮世の塩に揉ませるのは、如何にも気

が進まぬ祖母の意見」(六)によって、都市の女学校での寄宿舎生活を体験することなく、実家にあって家庭教師に学んだ。「すっかり箱入りの世間知らずに美育つた人」(六)として、実家からそのまま植村孝麿のもとに嫁いだのであった。

美子は、「それが何とした譯合ひで新進文化の尖端(トップ)を切つた郷里の父母と、アメリカ仕込み新帰朝の兄と、揃ひも揃つたハイカラでありながら、祖母育ちの箱入り娘を嫁に迎へる、此の縁談がなり立つたものか、縁は異なもの味なもの、まして家と家との結婚時代だ。当人同志の結婚は、家柄、門閥、格式と、この条件が揃はない限り『私の撰んだ理想の人を見て下さい』なんて、根つから相手にされつこない」(一八)と考える。

直美の数々の世間知らずな行為や実家自慢は、近隣の人々の噂による悪評がふりまかれるものの、かわいらしくも映る。少なくとも、漱石の『猫』に描かれる実業家の金田一家のような権勢をかさにきたものではないのだが、直美の言動は美子をいらだたせる。それは、もとは同様の階層にいながら下降してしまった美子の、自身のもう一つの生の可能性を垣間見させられるという点で、彼女の神経を逆なでるものであったからであろう。美子の名前は、花袋の「蒲団」の女学生・横山芳子(よしこ)と同音である。かつて女学生のモードに身を包んだ芳子＝美子が、そのまま「家柄、門閥、格式」の条件の合う男性と結婚したときの姿が、嫂だったのだ。

「デツカンショ」に描かれる植村一家の夫婦関係は、「一高教授」の孝麿が種々の裁定を下しはするものの、経済的にも妻が自身の名義の小切手を切る自由をもち、互いに思ったことをフラットに言い合うことのできる新しい家庭のあり方を示しており、漱石の小説が描く家庭像ともまた異なっている。互いの慣習のすり合わせが結婚であるが、作品「デツカンショ」では、資産よりも文化資本の重要性が示されることになる。そうした価値観が露呈するのが、言語の階層性をめぐってである。

七　言語の階層性

作品の冒頭では、植村教授の妻・直美が用いた「如何して」の語が、幼い娘の万里子に伝わらず両者の意志の疎通が疎外された事例が紹介される。直美は行動の理由を尋ねるために「如何して」と用いたのに、東京育ちの万里子には「如何して」は行動の手段を尋ねる語にしか理解できなかったことによる齟齬であった。

また、作品の中盤では、東中野駅前の三嶋屋に集まる庶民たちの、いなせできっぷのよい江戸弁による噂話が多用される。視点人物の美子は、その江戸っ子言葉を理解でき、心中で軽やかに遊びつつ、彼女自身がベーシックに用いるのは山の手言葉である。作品全体を通じて、「標準語」を「方言」(「お国なまり」)より上位におく植村教授と美子、ひいては作者・永代美知代の、きわめて近代的な言語観が提示されるのである(24)。

行動(ＨＯＷ、どのような手段で)を表現する「如何して」と、原因(ＷＨＹ、どのような理由で)を表現する「何故」とは峻別されるべきであるのに、直美が方言によって両者を混用してしまうことが、

言語の専門家とされる植村教授によって問題視されている。ただし、各種辞書類では、副詞「どうして」は、「(疑問や推量を伴って)原因・方法についての疑問を表わす語」・「(イ)どうやって。どんなふうに。」「(ロ)何故。どういうわけで。」(『日本国語大辞典』)とされており、辞典に掲出された用例からも原因を表す「どうして」は必ずしも特定の地域でのみ使用される語ではないようである。

ともかくも本作品では、標準語は方言よりも上位に置かれ、植村教授は、妻に対して、「お国なまりと、きつぱり縁切つて、如何(ホワイ)と何故(ホワイ)を正確に、日本語で使つて、君と万里子と母娘につきまとふ、悲しい因果を、これきり綺麗に打ち切るやう、僕は心ぞ底から嘆願する。嘆願しないで居られない」と、娘の教育のために、方言を矯正して共通語を使うように要求する。近代日本において、国家的・普遍的で正しく美しい標準語と、地方的・偏頗で醜く誤った恥ずべき方言という階層関係が、帝国主義的な国民国家を形成するために作られ利用されてきた(25)。「デツカンショ」末尾の挿話でも、孝麿は再び妻に対して、娘との意思疎通のために、方言を廃することを求める。

さらに、英語と日本語の関係も、本作が示す重要な言語の階層関係である。「デツカンショ」では、「倶楽部椅子(クラブチエイア)」『習うより馴れろ(プラクチス メイクス パアフエクト)』のごとき、英語によるルビが頻用され、英語運用力が近代人として必須の技能でありモードだというメッセージが送られる。

作品の結末部は、「永年教会の理事」を務めて欧州視察旅行をすることになった名士が、外国人宣教師の用いた「アイ　ミス　ユウ」(I miss you. あなたが居ないと淋しい)を理解できず憤慨した挿話や(26)、一高受験生の入試のミスの挿話が引き合いに出されて、英語の重要性が説かれる。先に方言廃止を求めた植村教授は、妻に対して再び、「処で君に頼みがある。此際君も決心して、断然英語の勉強を始める事だ」、「此際長唄のテントンシヤンを全廃して、一意英語に没頭(ぼつとう)する」ことを要求する(八)。ここに示されるのは、「長唄」に象徴される日本文化よりも、「英語」を闊達に運用できる能力の方が重要であるという認識である。西洋化こそが日本の近代化であったわけで、一高教授の権威を借りて、「母性愛」をくすぐりつつ、女性も英語を学習することの重要性が教化されていく。

岡田實麿は、優れた英語教育者であった。多くの参考書を執筆したが、ことに一九二一年(大正一〇)に開文社から刊行された『英作文着眼点』は大ヒットし、戦後も改版され広く読まれた。学習者がミスしやすい箇所を赤字で添削した同書について、江利川春雄は、「英作文参考書史上に残る傑作」であると評価する(27)。江利川は、「英作文の作り方」で實麿が示した「①邦文に囚われないこと」「②なるべく平易な普通の字句を用いること」「③文法の要領骨子を会得すること」の三点のアドバイスを、「簡潔ながら、内容は的確で、現在でも大いに参考になる」とも述べる。さらに、江利川は、「留学経験のある岡田は、日本の英語教育は「読解に偏することなく、書くことや会話(聴き、話すこと)も重視すべき」というのが持論だった」と総括する。

実際に、数多く残された實麿の受験指導文書や英語参考書を読むと、実用的な英語運用能力を涵養することを目指していることがわかる。「言葉の中にはデツド、ランゲーヂ、リヴィング、ランゲーヂ、直訳すれば活きた言葉と死んだ言葉と此の二つ」があり、「希臘語」「拉典語」や「日本では今日矢張中学校で学んで居るやうな國語漢文の如き

もの」は「書いた物は沢山残つて居るけれども、之を用ゐて話して居る人は何処にもない」「死んだ言葉」であるのに対し、「英語の如き、又は仏蘭西語独逸語其他日本語の如き」は「毎日使はれて居る」「生きた言葉」であって、「時々刻々に変化しつゝある」と述べる(28)。その上で、英語の学び方を実用的に教授していく。

同時に、實麿が合格に向けて受験生に送った極めて実戦的なアドバイスも注目される。渋谷新平編『英語の学び方』(大阪屋号書店、一九一八年)において、「第一高等学校教授　岡田實麿氏」は、「一　枝葉を去りて根幹に就け。／二　繁雑を避けて簡単に行け。／三　模倣は尊く理屈は卑し。右三ケ条は英語の各方面(英語邦訳、邦語英訳、文法会話、習字)の修得に際し常に心に銘し忘るべからず」とアドバイスするが、これは同書に収録された同じ「第一高等学校教授　畔柳都太郎氏」の「語学は理詰に修得すべし」の評と対比的である。他に、「答案はどう書けばよいか」「英語受験上の注意」といった長短の文章を、『官立学校入学受験全科及第秘訣』(弘学館書店、一九一六年)、雑誌『受験と學生』、新聞『駿台新報』といった種々の媒体に繰り返し執筆し続ける。需要も甚大だったのだろう。

官私をめぐる厳格な階層性のあるなかで、私学から官学の最高エリート養成機関の教授へと越境し、再び官を脱して私学に戻り、私立生も含めた若人たちが官立に入学するための実用的・実戦的な英語運用技能を伝授することに生涯をかけたのが岡田實麿であった。一高・帝大で英語・英文学教師を勤めながら職業作家に転じ、西洋文学を読みながらも、近世文学や漢文学を愛読し、晩年まで漢詩や俳句を創作し続けた漱石との対比がここでも見られる。

幕末以降、近代日本は英語と格闘し続けた。つい最近も、早期教育の名目のもと、小学校の英語が三年生に前倒しされ、五年生からは正式な教科に格上げ、授業時間も増加するという学習指導要領の改訂案が発表された。大学にあっても、種々の文書や教育の英語化が要求され、企業社会でも英語の公用語化や「使える英語」・資格取得の動きがかまびすしい。一方で、英語教育の専門家の間からも、こうした動きを危惧して、「言語は精神を支配する」ものであり母語教育の優先を訴える声も根強い(29)。本作「デツカンショ」は、近代日本の英語とのつきあい方の変遷を考える素材ともなりうるであろう。

おわりに

小説「デツカンショ」では、西洋〔英語〕／日本〔標準語／方言〕という階層性、東京／地方、ブルジョワ・知識人／庶民……といったさまざまな階層性が言語を通じて顕在化していく。

ここで見逃してはならないのは、ジェンダーの問題系である。植村一高教授の同志社時代の学友であるK新聞編集局長は、私学出の自分にはかなわぬ「帝大教授の夢」を、同じ私学出の孝麿がゆうゆうと越境したと語った。だが、戦前には、わずかな例外を除き、帝国大学も高等学校も女性への門戸は開かれていなかった(30)。美子の学生時代には、男子と同じ土俵には上れなかったのである。

ジェンダーによる格差を受入れて、家柄・財産に釣り合った相手と結婚し、実家にあったときと同様の生活を享受した直美に対して、美

子は小学校を卒業すると実家を出て女学校で学ぶために寄宿舎生活をする。だが、その先は男子学生と同様には進めない。孝麿と美子の兄妹の間には乗り越えられない大きな壁があり、だからこそ、美子は、誉れ高い文学者「秋目さん」の後任の一高教授である兄・孝麿を自身の代行者として誇りに思う。

そして、越えられない男女のジェンダーを埋めることのできる手段が、言語の修得であった。「デツカンショ」には、西洋／日本、東京／地方の区分の上位にある「英語」と「標準語」の運用を完全なものとすることが、近代日本の女性の必須の技能だというメッセージがこめられている。

大正末年に離婚して渡米した永代美知代は、日米開戦前夜に帰国し、妹の嫁ぎ先の広島県庄原市に隠棲した晩年にも、英語を勉強し続けた。晩年の美知代から英語を学んだ原博己氏は、「先生のお気に入りはＮＨＫ朝のラジオ英語会話の松本亨氏で」「英語の指導者として彼がいかに優れた人であるかを、先生からよく聞かされたものである」と回想している（31）。

> 先生は、たとえ一枚の広告紙も粗末に扱われなかった。むかし書かれたおびただしい原稿用紙も、英語のスペルの練習用に使われていた。［……］
>
> 美知代先生の日課は、英語で始まり英語で終わるといっていいほど、四六時中英語に向かい、大きな虫メガネで辞典を覗き込まれていた。
>
> ずいぶん昔、おそらくは渡米前に書かれたと思われる原稿がダンボール箱に入れられて、隣の物置代わりの部屋に幾つも積まれていた。十六年間に及ぶ滞米生活を経て日本に持ち帰られた原稿。あれほどまで執着し大切にされていた原稿を、なぜ惜し気もなく英語の練習帳にしてしまったのか。

美知代が何重にも英語のスペルを練習して書き潰してしまった原稿用紙の一部は、府中市上下歴史文化資料館に保存されている。日本からアメリカに運び、一六年に及ぶ滞米生活を終えて大切に持ち帰った若き日の日本語の創作原稿を、なぜ英語で上書きし、読めなくしてしまったのか。最晩年に、自身が書いた創作の堆積よりも、近代日本の知識女性の規範であるところの英語の使い手であり続けることを優先した美知代。その心境と認識の一端を、書き潰されることを偶然にも免れた一編の小説「デツカンショ」が垣間見させてくれる。

注

（1）岡田（永代）美知代については、有元伸子作成のサイト「広島の女性作家　岡田（永代）美知代」（http://home.hiroshima-u.ac.jp/okadamichiyo/）を参照。

（2）生前未発表作品は、宮内俊介によって、『田山花袋記念館研究紀要』の一〇号（一九九八年三月）に「云ひ得ぬ秘密」、一一号（一九九九年三月）に「猫の児同様」、一二号（二〇〇〇年三月）に「女学生の恋物語」が翻刻紹介されている。宮内は記していないが、うち二作は若き日の美知代が雑誌発表した小説の改作であ

る。「猫の児同様」は「出戻りさん」（『婦人評論』一九一三年一一月）、「女学生の恋物語」は「秋立つころ」（『希望』一九一五年一二月、一九一六年一月）の改作。また、「云ひ得ぬ秘密」は原博己も翻刻している（「岡田美知代の素顔」『梶葉』Ⅵ、一九九八年七月）。

他に、上下歴史文化資料館・田山花袋記念文学館が所蔵する美知代の未翻刻の原稿のうち、「愛憎」は「ある女の手紙」（『スバル』明治四三年九月）、「野獣」は「一銭銅貨」（『中央公論』明治四三年一二月）、「嫁姑」は「二人の家」（『女の世界』大正四年一〇月）の改作である。

（3）美知代は、一九〇九（明治四二）年に夫の永代静雄が勤務していた『中央新聞』に、無署名で「老嬢の告白」（全四三回）と「女子大学英文科出身　新夫人の打明話」（全三〇回）を連載している。詳細は、有元伸子「〈資料紹介〉『中央新聞』掲載の推定・永代美知代作品「老嬢の告白」―付　岡田（永代）美知代著作リスト」（『内海文化研究紀要』四一、二〇一三年三月）、同「推定・永代美知代作「新夫人の打明話」の描く結婚生活―〈別れる事情〉と花袋「縁」」（『花袋研究学会々誌』三三、二〇一六年六月）。

（4）府中市上下歴史文化資料館の平成一八年企画展の資料などを参照。

（5）親族によれば、慶大卒業後に福沢諭吉の『時事新報』の北京特派員や論説委員になったという。ただし、『時事新報』の索引には岡田實麿の名前は掲出されず、署名入りの記事は執筆していない。

（6）駒場博物館のご教示によれば、實麿の一高任用の時期は、『職員進退』明治四十年～四十一年では「明治四十年八月一日」、『退職職員履歴』の岡田實麿の経歴書では、「任第一高等学校教授」が「明治四十年九月十一日」で、「依願免本官」が「大正十三年四月十四日」である。

（7）村井知至「緒言」（第一外国語学校『英語研究苦心談　十六大家講演集』文化生活研究会、一九二五年）

（8）『駿河台学園七十年史』（学校法人駿河台学園、一九八八年）

（9）「英語学界の重鎮　岡田實麿教授逝去　予科追悼式挙行す」（『明治大学新聞』一九四三年九月一七日）。同記事では、「厳格なる教授と、著述に依る教育との功績は実に甚大であつた」と追悼している。

（10）都子の息子（岡田實麿の孫）である百瀬伸夫氏からご教示いただいたところによれば、百瀬家は、第二次世界大戦中に松本に疎開していたが、都子が大病をして、「美知代叔母に一目会いたい」と希望したために、美知代は庄原から汽車を乗り継いで会いに来て、数日泊まったという。都子は、美知代に親しみと敬愛の念を抱いていたとのことである。

（11）『学歴貴族の栄光と挫折』（中央公論新社、一九九九年）

（12）「日本における官学と私学―歴史と構造」（『大学研究ノート』一九八八年一月）

（13）前出『学歴貴族の栄光と挫折』第四章

（14）駒場博物館のご教示によれば、『職員進退』明治四十年～四十

一年において、「受持学科等ハ左ノ通ニ有之候……英語　岡田実麿　《ミセケチ過日》今般解嘱可仕候《ミセケチ夏目》中川講師ノ後任」となっている。夏目金之助からの解嘱願が明治四十年三月三十一日に第一高等学校長新渡戸稲造に提出され、中川芳太郎が、明治四十年四月「二十二日ヨリ当校英語ノ授業を嘱託」され、明治四十年八月三十日に解嘱。實麿が（文書により異なるが）、八月または九月に任用される。中川芳太郎の短期間のつなぎをはさんで、実質的に岡田實麿が漱石の後任として就任するのである。

（15）竹内洋「明治学校システムと漱石―宙吊りという特権」（『國文學』二〇〇六年三月）

（16）教えることが苦手だとされる一般的な漱石像に対抗して、川島幸希『英語教師 夏目漱石』（新潮選書、二〇〇〇年）は教師として優れた資質をもつ漱石像を丁寧に説明している。一方で、斎藤兆史は、漱石に関する資料を見ると、「高度な英語力と厖大な英語・英文学の知識を有し、そして英語の正しい発音も心得ていながら、おそらくは英語・英文学教師としての職業意識のため、まちがった英語を話すことをおそれて会話を敬遠する、典型的な学者の姿が見えてくる」と述べる（『英語襲来と日本人今なお続く苦悶と狂乱』中公文庫、二〇一七年）。

（17）学校法人駿河台学園、一八八八年

（18）『土地概評価　豊多摩郡中野町　大正九年八月調』（大正一一年、東京興信所）

（19）中野区民生活史編集委員会、一九八二年

（20）川添登「山の手」（『江戸東京学事典』三省堂、一九八七年）

（21）折橋靖介「百貨店」（前掲『江戸東京学事典』）

（22）小平麻衣子「もっと自分らしくおなりなさい―百貨店文化と女性」（『ディスクールの帝国　明治三十年代の文化研究』新曜社、二〇〇〇年）。瀬崎圭二『流行と虚栄の生成―消費文化を映す日本近代文学』（世界思想社、二〇〇八年）。

（23）渋谷隆一『大正昭和日本全国資産家地主資料集成Ⅰ』（柏書房、一九八五年）所収の各種資料によれば、「時事新報社第三回調査全国五十万円以上資産家表」では、土居通博は八十万円、美知代や實麿の父・岡田胖十郎は記載がない。「五十町歩以上ノ大地主（農商務省農務局調査　大正一三年）」では、土居通博は「田畑合計一三五、三町　小作人ノ戸数　三八六」で、岡田胖十郎は記載がない。

（24）美知代の言語観が表れている少女小説や評論については、有元伸子「〈地域性〉をめぐる攻防―岡田（永代）美知代と田山花袋の描くローカリティ」（『近代文学試論』五〇、二〇一二年一二月）を参照。

（25）安田敏朗『〈国語〉と〈方言〉のあいだ―言語構築の政治学』（人文書院、一九九九年）

（26）岡田實麿『前後関係で覚える　標準英語単語の研究』（開文社・泰文堂、一九三五年）では、英語受験準備するうえで、英単語は「単独の意味を學ぶよりも、他の語との結合上の意味を明かにする方が効果が多い」として、いずれも「恐ろしい」と訳されるtremendousとterribleは前後に付く語が異なり、おのづと

語意も異なる例を上げる。「過去十五年間の入試問題を検討」して抽出した「最重要単語」のなかに、miss も掲出されている。

miss［mis］a chance.［機を］逸す。

1. *miss* my watch.　1［時計］のない事に気付く。

2. *miss* you very much.　2［君が］居なくて淋しい。

3. a bullet *missed*.　3［弾が］外れた。

（27）『受験英語と日本人　入試問題と参考書からみる英語学習史』（研究社、二〇一一年）

（28）岡田實麿「活きた英語の学び方」（前掲『英語研究苦心談　十六大家講演集』）など。

（29）例えば斎藤兆史は、江戸時代からの英語受容を検討し、「自ら好んで言語・文化植民地になるようなもの」だと批判する（前掲『英語襲来と日本人』）。

（30）戦前に例外的に女子の入学を認めていたのは東北帝国大学のみで、一九一三（大正二）年に四名の女子の受験を認め、うち三名が合格した。

（31）『晩年の岡田美知代』（木精社、一九九二年）

付記　本稿作成にあたり、府中市上下歴史文化資料館、東京大学総合文化研究科・教養学部　駒場博物館、東京大学文書館、明治大学史資料センター、原博己氏に、資料閲覧・提供とご教示をいただいた。記して感謝申し上げます。

なお、本研究は科研費（26370238）助成による成果の一部である。

（ありもと　のぶこ、広島大学大学院文学研究科教授）

（いたくら　たいき、広島大学大学院文学研究科博士課程後期在学）

（まんだ　けいた、広島大学大学院文学研究科博士課程後期在学）

（くまお　さや、広島大学大学院文学研究科博士課程後期在学）